

8 高等教育機関合同公開講座



「函館学」

前期：函館の歴史を探る
第5回

「函館のロマンチズム
—近代文学の系譜から」

講師 函館大学

講師 安東 璋 二

開催日時：平成18年9月30日（土）午後2時～3時30分

開催場所：函館大学

函館のロマンチズム

— 近代文学の系譜 —

函館大学

講師 安東 璋二

はじめに — 〈北海道の中の函館〉と〈日本の中の函館〉

- ・ 亀井勝一郎「札幌のピューリタニズム、小樽のリアリズム、そして函館のロマンチズム」(私の文学経歴)。
 - ・ 和田謹吾「北海道の文学の四分類」(風土の中の文学)と北海道文学全集(23巻)の刊行、昭54~56。
 - ・ 山田昭夫「悲劇的精神系譜こそ北海道文学の正統」(有島、小林、島木、本庄、久保、*etc*)。
- 北海道の内地、松前国函館 VS 奥地札幌という対立的視点に欠けているもの。或いはその視野から欠落してゆく函館出身の一連の作家たち(長谷川海太郎、久生十蘭、水谷 準、長谷川四郎、*etc*)。
- ・ 昭和三十年代北海道文学論争の意味。
 - ・ 沿岸型と内陸型

○函館のロマンチズムと文学

1、啄木以前 — 栗本鋤雲と島崎藤村の箱館～函館

- ・ 栗本鋤雲(幕末の行政官、明治一級のジャーナリスト、安政～文久年間箱館奉行など、10年間箱館開拓)。その業績と回顧録、「箱館叢記」「七重村菜園起源」「養蚕起源」等(明治文学全集)。
- 開明的な函館の人づくり、町づくりの基礎をつくる。
- ・ 島崎藤村 — 栗本鋤雲に傾倒。「夜明け前」の喜多村瑞見、構想にも影響。函館の網問屋秦慶治の三女冬子と結婚(明32)。「破戒」出版費用のために来函(明37)。「津軽海峡」「突貫」「トラピスト」。冬子の育った明治期のハイカラ都市函館と秦家の開明性(森本貞子「冬の家」)。自主独立の家風、女学雑誌と明治女学校、札幌の小平小雪、藤村「家」の作品構造の基底となる。藤村文学の本質と函館の相関性。

2、啄木と函館

なぜ啄木、なぜ函館なのか(亀井勝一郎や伊藤 整の問い)。

- ・ 啄木の函館と北海道 — 啄木を招いた函館の苜蓿社と「紅苜蓿」。
- 来函時(明40,5~8)、函館の人口動態。人口八万八千余人(本籍人口七万六千余、出寄留人口約二万三千、入寄留人口三万四千余)本籍人口七万六千。一時寄留人口五万七千、流離定住と流離の人、定住者と寄留者の入りまじ

る海峡の港町。

- ・啄木「小樽のかたみ」の函館批判 — 函館は殆ど内地的。札幌こそ北海道。小樽は最も自由な新開地。「函館で死にたい」ということばの真意。
- ・函館の海への思慕

「海が恋しい — これは予の浪漫的である。」(汗に濡れつつ)、「海といふと — 函館の大森浜が浮ぶ」「真の恋人」(明 41,6)。「啄木は林中の鳥なり — 予はもと一個のコスモポリタンの徒、乃ち風に乗じて天涯に至らんとす」(明 41,3)。脱日本的に開明化された海峡の町は、まさに「コスモポリタンの徒」にふさわしかった。啄木のロマンチズムと函館の歴史的風土がもたらすロマンチズムの相関。

3、啄木の系譜と函館のモダニズム — 啄木の浪漫的憧憬を实践した作家たち

元町育ちの同窓 (弥生小学校～函館中学)

- ・長谷川ビリー海太郎 (明 39、弥生小)。アメリカ放浪と日本回帰。
「めりけんじやっぶ物」(谷 譲次)、「丹下左膳」(林 不忘)、「この太陽」(牧逸馬)、「世界怪奇実話」(〃)、「釘抜藤吉捕物帳」(林 不忘)、「踊る地平線」(谷 譲次)、いずれも文体を変える。一人三人全集、一世を風靡。ハイカラ性、ダンディズム、日本回帰。
- ・久生十蘭 (阿部正雄。明 41、弥生)。フランスに遊学、パリ物理学校、技芸学校。演劇をシャルル・デュランに学ぶ。
「湖畔」「ハムレット」「鈴木主水」(直木賞)、「無月抄」「玉取物語」「春雪」「魔都」「十字街」「母子像」(国際短篇コンクール一席)、「地底獣国」(阿部正雄)、「顎十郎捕物帳」(六戸部力)、「平賀源内捕物帳」(谷川 早)。
冒険小説、SF コメディ、推理小説、捕物帳、現代小説、時代小説、ジャンル横断、変幻自在の語り。
- ・水谷 準 久生と同期。早大仏文。「お・それ・みお」「胡桃園の蒼白き番人」「空で唄う男の話」「殺人狂想曲」「或る決闘」。幻想ミステリ、心理、ユーモアミステリに特色。「新青年」編集長として多くの作家発掘。昭和のモダニズム文学を支える。
- ・長谷川ジミー澁二郎とスタンリー澁 (海太郎の二弟・三弟) 前者は画家、推理小説家。後者は満州文学界で活躍。「デルスウザーラ」(アルセエニフ) 訳。
- ・長谷川アーサー四郎 (海太郎四弟) シベリア抑留生活。唯一の純文学? 作風。「シベリヤ物語」「鶴」など、大陸的なスケールの自由な作風で現代文学の評価は高い。詩人。

× × ×

亀井勝一郎（明 45、弥生）の精神遍歴

函館—山形—東京　青春時の左翼活動から日本浪漫派へ。さらにゲーテから日本の古典。大和古寺巡礼の旅を経て親鸞に至る美と求道の精神遍歴。大著「日本人の精神史研究」に挑んだ生涯も浪漫的な魂の旅を思わせる。

- ・これら多様な才能や資質の自由な発想に共通するのは、海を越えてゆく越境性、放浪漂泊の夢、自由への欲求。その一方でその浪漫的な魂の帰属を求める日本への回帰意識。

それは自から開拓の大地に挑む定住者の北海道文学的リアリズムと一線を画している。

彼等のモダニズム、ロマンチズムは大正期函館の脱日本的な街並みや独自の歴史的風土から映発されている。

4、近代から現代へ（Ⅰ）

- ・函館周辺の作家たち　— 今 東光、今日出海、岡田三郎、下母澤 寛、八木隆一郎、野田高梧（シナリオ）、寒川光太郎（芥川賞）、石塚喜久三（ 〃 ）ら。

- ・木村不二男　函館師範。「古譚の歌」（中央公論新人賞）、「有島供養」（新潮）、「防人の唄」（新潮）、「北洋の男」（新潮）、「鈴木三重吉」（中央公論）。

戦後、森町に住み、北海道文学者懇話会会長。

- ・詩歌の人々　散文作家たちが殆ど函館を離れて活動したのに対し、函館に在住して活動したのは詩歌の人たちだった。函館のロマンチズムを多様に表現したのもこれらの詩人たちである。

宮崎郁雨（海峡詩社）、砂山影二（第一次 海峡）、海老名礼太（北方の詩）、高橋掬太郎、片平庸人、三吉良太郎、小野連司らの活動。

俳句の斉藤玄や短歌、川柳人、結社の盛んな活動。

ゆかりの詩人として吉田一穂、三木露風、北原白秋、宮澤賢治、野口雨情らもいる。

5、近代から現代へ（Ⅱ）

- ・北海道文学論争の意味　北海道には北海道らしい文学をという提言に対する高階玲治「汎日本的であって悪いか」の反論で火がつき、「北海道新聞」紙上で本格的な論争。

○現代に至る函館ゆかりの作家の周辺

- ・佐藤泰志（昭 24～平 2）。「きみの鳥はうたえる」（芥川賞候補）、「空の青み」（ 〃 ）、「水晶の腕」（ 〃 ）、「黄金の服」（ 〃 ）、「美しい夏」「オーバーフェンス」（芥川賞候補）、「そののみにて光輝く」（三島賞候補）、「海

炭市叙景」。函館がモデルの地方都市の人と生活をよく描く。しかし、私小説ではない。函館の地誌的記憶を自在にデフォルメし、豊かな想像力で描く。

- ・辻 仁成 — 「海峡の光」で芥川賞。今日に至る活発な作家活動は周知。やはり函館の地誌的記憶を生かした作品もあるがその領域は多彩でフィクショナルな倫理性を持つ。ミュージシャンでもある。
- ・宇江佐真理 — 時代小説で世に出る。想像力豊かに人情の機微をとらえた作風は再三直木賞の候補に上る。作品の発想の豊かさは久生十蘭らの時代小説の才能と重なるものを感じさせる。
- ・今井 泉 — 函館文学学校出身で連絡船船長の経験を生かした独自の海洋ミステリで人気を得る。「溟い海峡」で直木賞候補。サントリーミステリ大賞読者賞受賞作もある。
- ・井上光晴 — ゆかりの作家として函館の風土に魅かれ居を構えてこの地から発信する文芸誌の発行に情熱を傾けた。文学伝習所の開設もその一環だった。
- ・谷村志穂 — 出身ではないが函館に住む祖母の縁があり、親しく函館独自の風土に愛着し、作品の材を求める。近来函館に一戸を構えて活動の用意。ゆかりの作品に「海猫」「黒髪」(小説すばる連載)。

近年、函館の地域の文学活動は道内でも最も活況を呈している。函館文学学校の活動から派生する同人雑誌など過去最高の十八誌を数え、力のある書き手の活動も目立つ。

「市民文芸」に加え、地方では珍しい「いさり火文学賞」のあることもその事情を裏書きする。その作家達の特徴もフィクショナルなものが多く、そこに風土の伝統的なロマネスクの世界を感じさせる。

6、むすびに

札幌のピューリタニズム、小樽のリアリズムも今は名のみ。北海道の悲劇的精神の系譜もその影が薄い。函館のロマンチズムのみは今もという感じだが、それも昔と同質ではない。連絡船はなく海峡の港町の情緒もない。そこにあった放浪哀美のロマンチズムのかわりに函館山の夜景や倉庫街の観光地的ロマンがある。そこには人の心を本当に奥深くひきつける美がない。歴史的地理的にも函館が日本の中で類例のないところから開け、発展してきたことをあらためて認識するところから函館のロマンチズムの意味を考えたい。

しかし手前が幕府外交官として抜群の力を振ふに至つた素地は、實にこの時代に胚胎してゐるのみならず箱館在十年間の業績は、彼の外交における活躍に比して劣るものではない。却て北方開拓において、彼の精神は見事に發揮されたと言つていいほどだ。「箱館遺記」七重村築園起原「築園起原」の三篇は後に記したその回想録である。北方の盛衰を閉鎖し、新しい町の設備を著々と建設して行く有様は、眼に見るやうに鮮明に描き出されてゐる。彼の構想力は大きく、しかも緻密である。實生活に即して、合理的に必要性をみだし、その間における人間の洞察と運用は暖く正確である。自分の業績としては一つも迷へてゐない。すべて在任人の業績として記録してゐる。ここに登場する人々は、いづれも歴史にあらはれぬ無名の人達ばかりだ。そしてあらゆる階級と職業にわたつてゐる。

尾井勝一郎
(三人の足堂を)

津軽海峡に面した函館山の突端を、立待岬といふ。この岬に石川啄木の墓碑が立てられたのは、私の中学生時代と記憶するから、もう二十数年前のことだ。海峽に向つた墓碑の表面に刻まれてゐるのが右の一首である。墓碑には手紙の一篇、自分は死ぬときには函館で死にたいといふ意味の言葉がかかれてあつたと思ふ。啄木にとつて函館は異郷である。私は故郷へ帰るたびに、この墓前に立つて、異郷に死を求めた薄命の詩人の心情を思ふのだが、さういふとき私自身の裡に、啄木は何を好んでこんなところで死にたいと思つたのだらうかと訝る氣持が起る。異郷の人にとつて、こゝは夢の園であつたのか。自國の美を離れ外國人から指摘されて氣づくやうに、我々函館人は、啄木によつて土地の夢を与へられたのかも知れない。

②

四時の定刻には港口に着きました。あゝ甲板の上から函館の市街を望んだ時のその人々の歡喜は奈何でしたらう。山腹の傾斜に並ぶ灰色の板屋根、石と砂とを載せた南部風の家々の間には、新しく高い聲も響いて、松、檜、杉、の練葉につつまれた其光景、または日に輝く寺院の高塔から、税關と病院と多くの學校の建築物まで——その新日本の港の眺望は、煙と空氣とにつつまれて、自分等の眼前におもしろく展げました。

新崎村
(津軽海峡)
島崎藤村

③

函頭函館へ来た。海上も先づ無事。今度の旅には私に取つて忘れぬことの出来ないものが澤山ある。長らく山の上に引籠つてばかり居た私は、こゝへ来て、廣瀨とした海國の人の氣象に觸れた。そればかりでなく、わざ／＼こゝまでやつて来た旅の目的を果すことが出来た。「自分で書いたものを出版するといふのも一種の實業だ、要るといふ時に電報を一つ打つてこいせ、金は直ぐ送らう。」函館の阿爺にいかにも堅い商人らしい調子で私の望みを容れて呉れた。

(二人の足)

④

臥牛の山、突元として南天に聳立し、忘る暇なき故郷の天と我とを隔てたる、涙多き遊子のために、いささか霞みとすべきなきにあらざれども、然れども函館は実に爽しき海辺なり。船の上より望見して、緑茂き木木の間に現はれたる洋風の建築物のたずまひ、まだ見ぬ外國の港のさまの忍ばれしぞ恋しかりしに、巨森心の遊ぎに調べを合す字賀の浦曲の胡蝶や、また大船の汽笛は、巨人の言葉の如くして、深くも我が光を掃がせり。友と相携へて大森浜を行くに、北海の磯の香は強くして高し、砂をとって千細に見、心常に人生を思ふ。目に見るは幼初より不断の咆哮をあぐる大海原なり。

石川啄木(ハコガテの歌)

⑤

①初めて杖を留めた函館は、北海の咽喉と謂はれて、内地の人は函館をただで既に北海道其物を見て了つた様に考へて居るが、内地に近いだけ其だけ殆んど内地的地である。新開地の北海道で内地的地と云へば、説明する迄もなく種々の死法則の漸く繁盛されつゝある事である。昔開町の百二十余日、予は遂に満足を感ずる事が出来なかつた。②八月二十五日夜の大火は、函館に於ける背自然の悪徳を残らず焼き払つた天の火である。予は折々に退てるべき第二の函館の公めに預備して、秋風と共に遊泳を見捨てた。③札幌に入つて、予は初めて其の北海道風味を味ふ事が出来た。日本一の大原野の一角、木立の中の深緑に、幅広を折路に草生えて、牛が啼く、馬が走る。自然も人間も何処となく塵埃で轉然して、道をゆくにも内地の都会風なせゝこましい歩限をしない。秋風が朝から晩まで吹いて、見るもの聞くもの皆大いなる田舎町の趣きがある。しめやかになる窓の沢山ありさうな落葉、詩人の住むべき處と思ふて、予は限りなく喜んだのであつた。④然し札幌はまだ一つ足りないものがある。それは外でもい。生命の脱く限りの男らしい活動である。二週目にしうは札幌を去つた。札幌を去つて小樽に来た。小樽に来て初めて真に新開地的な、真に植民的精神の溢るゝ男らしい活動を見た。男らしい活動が風を起す。その風が即ち自山の空氣である。⑤内地の大部会の人々は、落し物でも探す様に眼をコロコロかせて、せせこましく歩く。旋け失せた函館の人も此舉に根柢を真似て居た。(小樽日報明治40.10.15)

⑥

「海といふと予の胸には函館の大森浜が浮ぶ。(略)◇一昨年、と云へば大火のあつた年である。(略)予は函館にゐた。その百二十余日の間、断れ断れな日記は、予と海との交情のいかに厚かつたかを事細かに語つてゐる。情人「海」と予との講史は毎日の様にかの大森浜の砂の上で送られた。◇その後小樽にもゐた。訓練にもゐた。然し小樽の海は、宛然成上りの富豪の細君の様に冷淡であつた。訓練の海は唯寒く唯寂しかつた。(略)予はまだ東京灣も見えない……◇海と云ふと、矢張り一に思出されるのは大森浜である。(略)」

⑦

「啄木は若年人であつたけれども、北海道の必要を最もよく把握してゐた(時)啄木の苦行こそ北海道の女としての」
伊藤整(夏の北海道)
佐々木(お和歌の地方色)
非田本(女の心)

⑧

それは北海道の誇りであり歴史である、バイオニヤの開拓精神が、彼の文学のどこにも移植されてないからである。由来北海道はバイオニヤの開拓によつて今日をなしたところであり、開拓者精神の誇りはいまもなお頭上に輝いている。したがって真に北海道的な文学を創造するには、この開拓魂にふれねばならず、自然の猛威とたたかいながら新天地を切り開いた、開拓集團の意志と思想と行動を描かなければならない。その点私は、本庄陸男の大作「石狩川」を真に北海道的な作品と考える。

山崎成之徳(補説石川啄木傳)

⑨

四月十二日
今日は日曜日。吉野君来る。都賀の代議士候補に花が咲く。山背吹いて打降つた日。夕刻、小雨を犯して吉野兄宅に行き、九時頃ツブ濡れになつて帰る。枕の上で一時遊覧する。平凡、中の大の話から栗原先生の話、大船君の話、やがて性格大氣眼を自分は脱く。海峽新聞の計画、太平洋大学の改題。

(明治41)

山は動かされども、海は常に動けり。動かざるは眼の如く、死の如し。しかも海は動けり、常に動けり。これ不断の寛濶なり。不折の白山なり。
我が魂の眞の恋人は、唯海のみと、我は心に叫びつ。
日記 (明治40.5.5)

〈資料2〉

幸徳秋水 (明治38年)

① 東北にすすむにつれてだんだんと暗くなっていくような気持がするの、いったん津軽海峡とびこえろと、たちまち夜が明けたような感じである。言語において、風俗において、電灯、電話等の物質的進歩において、かえって東京のほうが、恥ずかしく思われるくらいであった。(北遊漫録)

② この街は東京以北で一番近代的で、一番明るい。函館の街を見ると、東北地方の暗いかげから抜けてはつとすると、というのは多くの旅人の感想である。しかし私は、そこに対比的に日本の伝統に強く附きまるとわれる東北の根強さを見る。また私たちが北海道を知っている人間にとっては、函館は単なる明るい海港ではない。(略) 北海道にある北海道的な伝統をもつともよく集めているのは、一度の大火に焼かれたにもかかわらず、この街である。(夏の北海道)

伊井勝一郎

伊井勝一郎

④ 私の家のすぐ隣りは、フランスの神父のあるローマカソリック教会堂である。その隣りは、ロシア系のハリストス正教会である。この二つの教会は、夫々高さ五十メートルほどの塔をもつてゐるので、船で港へ入るとすぐ目につく。ハリストス正教会の前には、イギリス系の聖公会があり、ヤム坂を下つたところにはアメリカ系のメソジスト教会がある。私の家は浄土真宗だが、菩提寺たる東本願寺は、坂道をへだててわが家の門前である。また同じ町内の小高いところには、この港町の守護神である船魂神社が祭られ、そこから一直線に下つたところには、中国領事館があつて、こゝは道教の廟堂を兼ねてゐた。要するに世界中の宗教が私の家を中心に集つてゐたやうなもので、私は幼年時代を、これら教会や寺院を遊び場として過したのである。幼い私は宗教的コスモポリタンであつた。(老井全軍將校)

長谷川四郎

② 九州と本州を陸続きにしたように北海道と本州を陸続きにする海底トンネルは必要でもあれば、可能でもある。それは必ずや近い将来に開通するだろう。その時、連絡船は無用となるだろう。そして函館からまた客足は遠のくだろう。連絡船が遊覧船となり、函館はますます観光宣伝のりだすだろう。一方、函館は北海道における古典的な都市として、学校町とするにふさわしいと、私の中学の先輩、亀井勝一郎氏がどこかに書いていた。

このあいだ、友人と酒をのんでいた時、その友人は急に思いだして、「ふるさととは遠きにありて思うもの」とロザさんだ。そこでは即興詩(句)をつくった。
ふるさとなんかありやしない
あるのはわれらの現住所
すると、友人は「そうかもしれないね」と言つて笑つた。

(私のふるさと、北海道)

① このスコットの友人にジョン・ウィルがいた。ジョン・ウィルは晩年、函館に住み、その船長としての回想を書きのこしている。箱館戦争も目撃して、幕末から明治三十二年までの函館を中心とした航海者の記録として貴重な史料である。また早くもこの回想記を日本語に訳した、ウィルの年少の友、坂井長二郎がいた。ウィルの生涯と、そして坂井長二郎の生涯を、もつとよく私は知りたいと思つている。「ふるさととは遠きにありて思うもの」と室生犀星は歌つたが、今の私には「ふるさととは接近してよく見るべきもの」である。

(我々の函館)

⑫ でも、それだけが私が函館を好きを理由ではない。石川啄木が四か月しか滞在しなかつたにもかかわらず、この町を愛したのには理屈以外の何かがあるはずだ。決して自分の作品に函館を描かなかつたのにも、逆説的な同じ意味が込められている気がしてならない。この函館には、厳しい美しさの中に、人々の根源的な霊的記憶を呼び覚ます信号のよつなものが埋め込まれている気がしてならないのだ。

辻成、函館物語

たをくと波ただよへる只中に生れし男の子
名は海太郎

(長谷川四郎)

(是年勝一郎)

③ 二千年の歴史をもつ都と、黒船とともに明けた北方の港とは何といふ大きな相違があることだろう。ここには一切の歴史的記念物はない。(略) 古い開港場だったので、早くから洋風のしきたりが存在した。イギリス人的社交と、ユダヤ的貪欲とアメリカ的ダンディズムとがこの町の性格を形づくつた。この街は一種の植民地であり、あらゆるものの模倣であり、あらゆる地方人の奇合世帯となつた。(略) それでも過去においてこの町は二人の著名な作家を世に送り出した。ひとり石川啄木、牧逸馬である。尤も啄木にとつてこの街は第二の故郷であつたけれども、新開地のもつ野性と佻しさを最も美しく表現したのは彼の詩歌であつた。

(ノート。僕の街の性格(啄木の)は彼の詩歌であつた。)

(昭和二十年)

⑤

私は長崎生れたが、古い開港場としてこの二つの町には当然似たものがある。然し地理的、歴史的條件の違いは、或ひはむしろ反対の印象を与へるといへよう。長崎は古く唐・オランダの文化の匂ひがしみ込んで、函館のエキゾチシズムはもつと明るく開化的で、大陸的処女地の「自由」が行き交つてゐる。

(新島襄「日記」一八二四)

河上徹太郎(老井全軍將校)

⑦ 「函館は海に囲まれた街で——海太郎が育つた元町あたりは坂の街でもあつた。(略) 記憶のどこかに、坂と海が結びつた別の都会があつた。(略) 一瞬東南アジアのかつてのヨーロッパ植民地港町を思い出した。(略) 結局どこにも似ていない。(踊る地平線)

三三三

⑨

函館へ旅行した友人たちは必ず函館山の上からながめた夜景はすばらしいと言ふ。私は中学生の時地理の先生から函館山が古昔は海上の島で、それが打ち寄せられる波によってだんだんと砂の沖積ができて本土と島を結ぶ地峡となり、こうして函館という町の土台が作られたのだと教わつた。函館に生まれ育つた人は慣れたことになつて、なんとも思わぬだろうが、こんど初めて函館を訪れる若い二人の友といっしょに行つたら、彼らは「おもしろい地形だなあ」と言つていた。

(故郷函館)

⑪ 今年の二月、私は函館山の麓にさよならを告げ、仕事場を移しました。かつて啄木の澤在(まき)青柳町は目と鼻の先にあり、古い教会や寺院に囲まれた足跡らしき古い高台です。五年ばかり前からは文学位習所に向つていふささ、赤木を都市の風物と港のなまめいによりやく護り水、やがて終つて棲家は社越たまで入れあげようになつたのです。北海道の大地といわが雪明りの街と走り電車を走らせていふだけでも、失つた気概とふるさとを魂をもう一度洗い直したい気がします。

井上光晴(群像一九八八)

函館は高い岬の西部地区の斜面、いやむしろ底辺に位置して、ジブラルタルの地形と大変似ている。それはスペイン領から要塞を切り離している、中立の領地のような低い地峡によって、広々とした海岸線につながっている。その後方にたたずむ村と前方に広がる湾が他の特異な形状によって、人は常にあの有名なジブラルタルの要塞とその近隣を思い出す。

（ペリー提督）

東西半球をくまなく旅行した者なら誰でもしばしばその驚くべき相似点に胸を打たれる。全く別の国の峡谷や川の相似点ばかりでなく、地球のそれぞれ違った地域における相似点などは多様性の中の人間の共通性と同じで、それはこの地球の自然の成り立ちの中にも見られるのである。

（英国大使 ラザフォード・アスコット）

実際はほとんど類似点はない。はるかにずうっと似ているものとして、ナポリ湾とベスピオ山の関係の方が似ている。もしもベスピオ山の噴火口を山頂の高さまで押し上げるとしたらであるが、函館山とは色彩がまったく違う。片や火山灰と熔岩がはだけて見えるのに、片や鮮やかな緑の森とまきっている。そして、片や海と空が暖かいイタリアンブルーなのに、片や日本の不思議な、夢のような乳白色の光とまきっている。

（アンナ・C・ハーツホルン）

私は一日たりともメイン州イーストポートのことを思い出さないことはなかった。それは、この間にほんのわずかな類似点があるというわけではないが、さわやかで新鮮な空気、純粹で冷たい海水、魚の臭い、はるかな向こうの島が人にカンポペロ島を思い出させるからだ。それに、私がここでしている仕事は浚渫作業と同じで、故郷の幻想を意識にさらす役目をする。

（エドワード・S・モース）

函館は絵のように美しい。くすんだ色の家々の集団が海岸沿いに群がり丘の中腹まで達し、数軒の立派な寺院の荘重な瓦の屋根が見える。函館山は寺のすぐ背後に森林が突き出してそびえ立ち、港に覆いかぶさってそれを守っているように思われる。

（グラフィストン）

アメリカ・ペリー艦隊、北海道に銀板写真をもたらす。	1854年	(安政)	元)
横山松三郎、ロシア画家レーマンより洋画を学ぶ。	1856年	(安政)	3)
北海道最初の学問所「諸術調所」を開設。	1856年	(安政)	3)
続豊治、日本最初の洋式帆船「箱館丸」を建造。	1857年	(安政)	4)
アメリカ貿易事務官ライス、箱館に着任。	1858年	(安政)	5)
初代ロシア領事ゴスケヴィッチ、箱館に着任。	1858年	(安政)	5)
重三郎、大町に西洋料理店を開く。	1859年	(安政)	6)
初代イギリス領事ホジソン、箱館に着任。	1859年	(安政)	6)
医学所(病院)を設置。	1860年	(万延)	元)
英語稽古所を開設。	1861年	(文久)	元)
ブラキストン、鳥類を採集し、標本を作成。	1864年	(元治)	元)
日本最初の洋式城郭「五稜郭」完成。	1864年	(元治)	元)
木津幸吉、船見町に写真場を開業。	1866年	(慶応)	2)
田本研造、元町に写真場を開業。	1868年	(明治)	元)
渡辺熊四郎、大町に洋品小間物店を開業。	1865年	(明治)	2)
福土成豊、日本最初の気候測量所を設置。	1872年	(明治)	5)
内潤町に魁文舎書店を開業、新聞縦覧所を設置。	1873年	(明治)	6)
北海道最初の新聞「函館新聞」を創刊。	1878年	(明治)	1)
函館公園内に開拓使函館支庁仮博物館を開場。	1879年	(明治)	2)
石黒源吾、末広町でビールを製造・販売。	1882年	(明治)	15)
函館市中に乗合馬車開業。	1883年	(明治)	16)
北海道最初の下水道工事竣工。	1888年	(明治)	2)
函館共同競馬会、柏野に競馬場を開く。	1896年	(明治)	2)
函館電燈所開業。	1897年	(明治)	3)
北海道最初の馬車鉄道開通。	1897年	(明治)	3)
金沢正次、谷地頭で函館ビールを製造・販売。	1898年	(明治)	3)
函館市内、電話開通。	1900年	(明治)	3)
ノンプロ野球「函館大洋倶楽部」創設。	1907年	(明治)	4)
北海道最初の映画館「錦輝館」開館。	1909年	(明治)	4)

- ・ 日本初の洋式ストーブ「カッセル」の製造 (1856 安政3)
- ・ 最初-貿易船 海外派遣 「尾田丸」 アムール方面 エコラエスク (1861. 文久2) 「千歳丸」上海へ (1862. 文久2)
- ・ 居留外国人が住民と同居

※ 函館の地味なところからミスミヤノ州とウネコロン州を思わせる。他の特徴はオレゴン州に似て、さらに他州には三イライミ州とも似ている

(ハロルド・C・アリス・アイト夫妻)